

第32回「東書教育賞」の審査を終えて
審査委員長 谷川彰英先生



第32回「東書教育賞」の受賞者の皆さま、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。私からは、審査を実際に担当した責任者として、全体の印象と感想を述べさせていただきます。

私はもともと教科教育、特に社会科や生活科、「総合的な学習」等の研究者ですけれども、いろいろ最近の動向を見ていると、いわゆる教育論文もそうですが、学術論文、その他、様々な普通の出版物においても、作品に対する、その著者、執筆者の思いがこもったキーワード、キーセンテンスというものを非常に象徴的に見出すことができると思います。私は、今回、お集まりいただいている受賞者の先生方の実践論文の中から、キーワード、キーセンテンスを抽出して、先生方にお知らせしたいと思っています。今日お集まりの8名の先生方の中で、お互いどのような実践をされたのかということシェアできるようなかたちで、お聞きいただければありがたいと思っています。

まず、小学校部門では最優秀賞は、**淀野秀樹先生、山形県南陽市立梨郷小学校、「総合的な学習の時間」**です。タイトルは「これからの地方創成の一考察～平成27年度浦戸諸島訪問活動から～」です。これは、文句なく最優秀賞に選ばれました。この実践は、山形県置賜地方の梨郷小学校のお子さんたちが自分の梨郷地区の名産である白菜のルーツをたどり、その種をもた

らした塩釜市の浦戸諸島に行き、そこから種をもらって梨郷地区でその白菜を育てて、それを浦戸諸島の皆さんに届けるという非常にスケールの大きな実践でした。浦戸地区は、東日本大震災で津波の被害を受けた所です。震災復興支援という意味でも地方創成の実践として多くの評価を受けました。梨郷小学校では十数年前から「のびのびファーム」という名前の下、食農教育というものを中心に実践されてきているようですが、今回の実践は、その一環として行われたものです。キーセンテンスとして、浦戸を訪れた児童の作文の一節の中にこんなものがありました。「人の笑顔を作るには、四つの気持ちが必要です。やる気、元気、根気、本気です」。これはごく普通の言葉ですが、その後には次のように書いています。「笑顔にするということは、身近な人に笑顔でいてほしいと思う気持ちから始まると思います」。私には、これが一番びったりきました。笑顔にするということは、身近な人に笑顔でいてほしいという思いから生まれてくるんだ。これが梨郷小学校の実践でした。

優秀賞は**窪谷理先生、茨城県神栖市立大野原西小学校、「理科」**です。タイトルは「実感を伴った理解を深めるための教材開発と理科学習指導の工夫」です。これは5年生の理科の「メダカのたんじょう」という単元で行った実践です。校内にあるピオトープやグループ水槽などを活用して、実感を伴った理科学習として実践され

たものです。絶滅危惧種であるクロメダカを捕獲し、ビオトープで飼育するところから実践をスタートして、ICTを有効に活用するなどして客観的なきめ細かい理科の学習が展開されているところが評価されました。学習のはじめに、「よみがえれ、メダカの学校～ちいきのクロメダカをふやそう～」といったキャッチコピーを理科室に掲示したあたりもユニークな実践だと思いました。キーセンテンスは、メダカの卵を覗いたときの感動を表した児童の言葉です。単純な言葉です。「卵の中のメダカの目が見えた時はとても驚いた」。卵の中を見たらメダカに目があったということです。こういうところに素直に感動するところが、すごく印象に残りました。

次の優秀賞は、中村めぐみ先生、茨城県つくば市立並木小学校。これはICTと「総合的な学習の時間」です。タイトルは「主体的・協働的な問題解決における論理的思考力の育成」です。ICT関連については、後で赤堀先生から詳しい講評をいただけたと思いますけれども、この実践は小学生を対象とした教育用プログラム環境を活用し、プログラミングに関する学習を行うことで問題解決能力や論理的思考力を育てようとした実践です。「つくばスタイル科」という、つくば市独特の「表現」の学習として、タブレットPCでプログラミングのアプリケーションを活用したことが高く評価されました。私が注目したキーワードは、子どもの言葉です。「自分でイラストを動かせるから」「みんなで考えられるから」。イラストが自分で考えられる、あるいは、動かせるということがキーワードのように思いました。

次の優秀賞は、三谷祐児先生、鳥取市立美和小学校、「学級経営」です。タイトルは「俳句で学校づくり～俳句づくりと全校俳句大会の実践を通して～」です。これは校長先生の指導によって俳句づくりを通して特色ある学校づくりを進めてきた1年半の記録です。校長先生のリーダーシップというものは、これから非常に

期待されてくるわけですから、その一つの典型的な例として、この実践が評価されました。キーワードは文字どおり、「俳句で学校づくり」です。この「俳句で学校づくり」というタイトル、一見何のことか分からなかったのですが、とても印象的な言葉として私は受け止めました。この実践は、まず俳句に慣れることから始め、次に俳句に込められた価値に気づき、さらに、全校俳句大会などにつなげるなど、みごとな展開を示しています。この実践の目的は、実は、児童が自在に俳句をつくることによって、その頑張りを称揚することで、感性を磨くとともに自信と活力をよみがえらせることにあったと言います。校長先生のリーダーシップの下に、その成果が実っていると思いました。

続いて中学校部門です。最優秀賞、新谷陽子先生、広島県福山市立培遠中学校。私は地名の研究者ですが、面白い地名で、栽培の「培」に「遠い」という字を書きます。「国語」です。タイトルは「古典に親しむ生徒を育てる学習指導の実践」です。「古典の中にはたくさんの発見がある。その発見が、今自分が生きている現代とつながったとき、生徒の中では『古典の世界』が身近な存在になる」。非常に簡潔に中学校の教科指導の本質を突いているように思いました。古典作品を暗唱、音読する学習から始まり、言葉の響きやリズムを体感させ、古典を耳から楽しむ学習を浸透させています。また、この活動を学級対抗群読大会というものに発展させて、調べ学習、意見交流会につなげているところも特徴だと思います。キーセンテンスですが、1年生が振り返りの言葉でこう言っています。古典の授業について二つのことを言っています。「一つ目は古典の楽しさです。みんなでこの人のここが悪いとか盛り上げられることです」、つまり、楽しいということです。「二つ目は意見を言い合えるところです」。こういう言葉の中に新谷先生の実践の背景が見えるように思いました。

優秀賞は、最初に安藤司先生、愛知県豊田市

立石野中学校。これはICTと「保健体育」です。タイトルは「楽しみ、助け合い、喜びを共感する生徒の育成」です。技能の高い生徒がマンツーマンで教えるペア学習制度とミーティングを取り入れ、友達同士が関わりながら体育実技を伸ばす手法とデジタルカメラを使って自分の姿を客観的に捉える視点でICT部門で高い評価を獲得しました。キーセンテンスは、この一言です。単純な中学生の感想ですが、「A男君ができた時は驚いたけど、自分でもなんだかわからないけどうれしくなった」。これはいいと思いました。自分でも何だか分からないけど、友達ができることによってうれしくなった。これは何かこの先生の実践の根本にあるのではないかと思いました。

次の優秀賞は、下野六太先生、福岡県宗像市立河東中学校、「保健体育」です。タイトルは「子どもの自尊感情を高め、豊かな人間関係を目指す体育の実践記録」です。この先生の指導は「下野式体育」としてたいへん有名になっているようですが、生徒自身がスモールティーチャー(ST)となって互いに教え学ぶというシステムで展開される場所に特徴があります。ST活動の場面は、教える側と教えられる側に大きな技能的な差がないこと、取り上げる種目によってSTが入れ替わることにポイントがあり、互いに自尊心も高まるという構想で考えられています。生徒の感想ではこのようなものがありました。「たった一単元の授業なのに僕のフォームを変え、もしかすると僕のこれからの生き方を変えた一単位だったのかなと思います」。一つの実践、一つの単元が自分の人生まで変えてしまっているように思うという感想、この先生のすごさを感じました。

次の優秀賞は、若林教裕先生、香川大学教育学部附属坂出中学校、「理科」です。タイトルは「科学的な見方や考え方を高め学びに向かう力を育む運動単元の実践」です。この実践は、私は中学校の理科の授業としてのモデルとなるような実践だと思いました。運動とエネルギー

という単元で、まず学習前後の一人一人の個の文脈を把握し、それを元に生徒がどの立場を決められるかを問い、それを科学的な根拠を踏まえて述べられるようにするという学習過程が組み立てられており、生徒たちは次第に科学の世界、理科の世界の本質に迫っていきます。生徒の感想からキーセンテンスを二つ紹介します。「この力の勉強は、自分たちの身近なことに次々と疑問を持たせてくれたものだというように感じた」、「以前は、物が動いたり、止まっていたりするのを見ても、何とも思わなかったけど、今は、どんな力がはたらいているんだろうと考えるときがある」。

最後に、先生方に私からのメッセージを申し上げます。

新しい教育課程が目前に控えております。従来ない斬新な発想のもとに作られた学習指導要領に期待するところは大きなものがあります。ただ、教育関係者に望みたいことは、新しい学習指導要領によって従来の教育が大幅に変わるものではないことを自覚していただきたいということです。アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントなどのキーワードが大輪のように咲き誇っているようにも見えますが、実はこれらの背景には従来積み重ねてきた実直なまでの教育実践があると言えます。私たちはそのような教育実践につながる作品を「東書教育賞」として選ばせていただきました。

本日、受賞された先生方は、大輪の「花」のような存在だと思いますが、その「花」を支えるのは「萼(がく)」であり、「莖」であり、「葉」であり、そして実は、地中に「根」があることを忘れないでいただきたいと思います。教育実践というものはそういうもので、ただ「花」がポンと出てくるものではない。地中に「根」をしっかり張って、そこからしっかりした「莖」が出て、「葉」が出て、「萼」が出て、そして「花」が実る。これが、教育実践の本来求める姿ではないかと私は考えます。私は、そういう教育実

践を先生方がされた結果、本日の授賞式に至ったと考えておりますが、そういう実践を支えるのは一体何であるかと言いますと、それはわれわれ自身の子ども観ではないかと思えます。つまり、子どもをどう見るかという考え方が根本にないと教育実践は本物にならない。

実は私は、民俗学を作ったと言われている柳田国男という人物の研究者です。柳田は明治から昭和の戦後に至るまで長い長い人生を送ってきたわけですが、その中で実に多くの教育論を語っています。特に戦後新設された社会科という教科に関しては、非常に大きな期待を示していました。柳田は、このように言っています。「社会科教育の原理は、どのようにもむつかしく説き立てることができましようが、ともかくも始めて人の世にぱっちりと眼を開いた者に、退屈させるような話をしてよいという理由はありません。試験に引っ掛けなければ記憶もしないような知識を詰めこんでそれが何になりましよう（中略）」。

その後、子どもたちの問いということを言っ

ています。「子どもたちの問いは、もちろん問い方が幼くたどたどしく、それを正しく言いかえさせて、やっと答の与えられる場合もあります。あるいはそういう事はもっと大きくなってからでないと、話して聴かせても判らぬから後まわし、と言わなければならぬ場合もままあるでしょう」。問題はその後です。「しかし大きな人がよく知っていて、今はまだ答えられないのだという時と、知らないものだからああ言って通げるのだというのは、子供は敏感でよく見分けます」。

こういう子どもの捉え方は、実は教育学者顔負けの教育観、子ども観を実はもっているわけです。そういう子どもの捉え方をきちんと押さえた上で、これからも実践を続けていただきたい。

今日、受賞された先生方は、多くの成果を残されているわけですが、ぜひ後続の先生方にもそういう精神を伝えてもらいたいということをお願いして、私の講評に変えさせていただきます。おめでとうございます。



受賞された皆さん、おめでとうございます。

私からはICT関連論文の講評をいたします。ICT関連としては、2編の優秀賞が出ていますので、そちらを中心にコメントをさせていただきます。

まず、小学校部門におきましては、先ほど谷川先生も触れられましたけれども、茨城県つくば市立並木小学校の中村めぐみ先生の実践です。「総合的な学習の時間」におけるプログラミング教育です。今、プログラミング教育は、先ほど

の千石社長のお話にもありましたが、アクティブ・ラーニングやその他のいろいろなキーワードの中でも非常に注目されている領域、研究部門だろうと思っています。その中の一番のキーワードは、「プログラミング的思考」という概念です。「プログラミング的思考」というと、通常は何かプログラミング言語でプログラムを書くことが想定されるのですが、今、言われているのはそういうことではなく、プログラミクな考え方を小学校の時からきちんと身に付けさせてほしいという考え方です。中村先生の授業実践のすごさを感じたのは、小学校1年生にどうやって「プログラミク的思考」を習得させるかということなのです。これが非常に面白かった。プログラムというものは、人間と違って決められたとおりに動くことを子どもたちに知らせながら、自分を振り返らせているのです。そして題材は、例えば、「掃除の仕方を順番どおり書いてみよう」ということでフローチャートを書かせるのです。確かに言われてみれば、掃除の仕方も順序があります。だからやっていたのでは効率が悪いわけで、そうすると一定の順序で、しかも、論理的にきちんとつじつまが合って掃除をすることで、効率的に掃除ができるということをお教えています。

そして、特に面白かったことは、小学校1年生ですから、「忘れ物をしないようにしましょう」という題材です。ここで、自分でフローチャートのような手順を書いているのです。面白かったものだから、ちょっと読ませていただきます。「忘れ物をしないための手順」が書いてありました。まず、1年生です。一番目、「家に帰る」。家に帰ったらどうするかというと二番目に書いてありまして、「明日の準備をする」。三番目で、「時間割を見て、明日何を準備すればいいか分かる」。これはいいですね。この手順どおりにやれば間違いなく忘れ物をしないだろう。四番目、「連絡帳を見る」。確かに先生の連絡帳があります。それを見て、ランドセルに入れ、さらにノートや教科書を入れるという見

事な自分なりの手順をここに書いて実践したことは、まさに「プログラミク的思考」です。このとおり実行すれば、おそらく、ロボットであれば忘れ物をしないロボットができるという仕組みになるわけです。これはテクノロジーを使うかどうかは別個として、そこに流れている論理的な思考を小学校1年生でやっているところに私は非常に興味をもちましたし、また指導力にも非常に感心しました。

それから二番目は、中学校部門の愛知県豊田市立石野中学校の安藤司先生で、保健体育です。タイトルを見ると「楽しみ、助け合い」というキーワードがあり、すぐには保健体育とは結びつかなかった。しかし、読んでみると、先ほど谷川先生もおっしゃっていましたが、ペア学習なのです。これは、私は非常に面白いと思いました。なぜかということ、通常、マット運動やいろいろな場面の自分の姿をデジタルビデオで撮り、それを振り返る。これはよくあることです。自分もスポーツジムに行っているの、ときどき「ちょっと自分のクロールがどんなになっているのか見たい」と思うときもありますが、なかなか見られません。それを見れば、「たぶん、ここをこうしたほうがいいんじゃないか」というリフレクションが起きますので、自分で改善することができます。

ただ、二人1組になって、それを見て一人が「君、ここはこうしたらどうだ」とアドバイスを与える。そして、受けられたほうは自分の姿を見て「そうなんだ」ということでやっていくわけですが、そこに、どうも段階があるのです。合格とか不合格というラインがあるようで、まるで入試のような感じです。どう書いてあるかという「教えた子が合格するとすごくうれしかった」と書いてありました。これは、まるで教師そのものです。教師というのは、子どもがよくなるのが幸せなわけで、それで生きているわけで、何か金儲けで、幸せを感じるのは教師ではないわけですよ。子どもが、相手が向上したから自分は「ああ、教えたかいがあった

んだな」ということの全く同じ心境を、この子どもは言っているところに、「なるほど、ペア学習の意味はこういうことだったんだ」と思いました。そして、これもすごいことを言っています。「教えることが自分の技に対する意識の向上につながった」と何か哲学めいたことを言っていますけれども、それだけ教えることの意味をよく知ったのだらうと思います。それから、「今まで、つまらなかった基本練習だけど、教えてもらおうとすごくやりやすかった」と同時に「教える楽しさが少し分かったような気がする」と言っています。おそらく、この人は将来先生になるのではないかと私は思いました。そんなことで、いろいろな優れた実践がありました。

私が思うに、特に教育実践は、どれを見てももちろん感動がある。確かに、谷川先生が言われたように1輪咲いたきれいな花かもしれないけれども、私は、それは人がものまねできる花であってほしいと思っています。言われてみると、先ほどの小学校1年生の忘れ物をしないための手順を書きなさいというようなことは誰でも実践できるわけです。誰でもものまねができるわけです。デジタルビデオやデジタルカメラで動画を見させて振り返らせ、ペアで学習する。これは、どこでもできるはずです。「それは無線LANがないとできません」とか「デジタル大型電子黒板がないとできません」ではなく、持っている道具をどうやって使うかという点で「これだったら自分の学校でもものまねできるなあ」というところに教育実践の面白さがあると思いました。

そこは、研究とは違うところですよ。研究者が人の論文をものまねしたとたん、この人は生命を奪われるわけです。これはオリジナリティを盗んだわけです。新たにオリジナル、新しいものをずっと追求していくこと、私もそれをずっとやってきて、新しいものばかりを追いかけてきたわけですが、しかし、教育実践というのは、ものまねできることが大切です。そして、よく考えてみると、ものまねしてもらおうほどの実践

がやはり優れているわけなのです。優れていなければ人はものまねしたいとは思いません。と考えると、誰でもものまねできるということが、いかに価値の高い実践であるか、研究であるかということです。そういう点で、この二人の実践は、すぐにでも他の先生方がものまねしてもらえるのではないかと思います。ものまねしていただけるだけで、おそらく、われわれは一種の幸せ感のようなものを感じるかもしれません。そういう点で二人の実践は、現在ある道具を使いながら子どもたちの姿を赤裸々に、そして、また、その能力を引っ張り出していくところに、私は東原先生と一緒に、この二つの論文はすばらしいということで選ばせていただいたことを報告させていただきます。



本日受賞された先生方、本当におめでとうございます。

私は、昨年度から、審査委員として東書教育賞の審査を担当させていただいています。私は教育心理学の専門で、この10年余り、自分たちが大学に子どもたちを呼んでいろいろな実践を企画する、あるいは、学校に出かけて行って、その学校の先生方と一緒に何か実践をする機会もよくあります。それを論文にするようなこともありますので、そのときは審査される側です。

この度、審査をする側になってみて、審査する立場で読んでみると、どういう論文が面白い論文なのか、いい論文なのかということが自分でも分かるのではないかと、自分が審査される論文を書くときにも、参考になるのではないかと考えたのが私が審査委員を引き受けた動機の一つです。先生方のすばらしい論文を読んで、私はどういうところがすばらしいのかというところを、改めて内省的に考えてみました。

まず、その研究を始める前に先生方が一体どんな問題意識をもたれたのか、そのためにどんな工夫をされたのか。これは実践前だと思えますが、ここが普段の実践をしながら、「どうもこういうところがうまくいっていない」、あるいは「今日的な問題として、こういうことが大事なんだろう」というような問題意識をもつ、それが鋭いと、こちらも「読んでみたい」と思う。また、工夫をした点が面白いときも「これは、ぜひ読んでみたい」という気になります。

次に実践を始めてからですが、ここで子どもたちの生き生きとした姿が描かれているものは、やはり面白いと思いました。谷川先生にしても赤堀先生にしても、今のお話の中で引用しているものは、子どもたちの声なんです。子どもたちの姿です。それが、生き生きと書かれているものは、非常にインパクトがあって面白いと思いました。

最後に論文として書くときには、実践の後にどう振り返るかというところを先生方は書かれると思います。もちろん、どれもいい実践ですから、こういうところがよかったという話はたくさん出てきますが、それだけではなく、どのような課題が残されたのか。どんな実践でも、100%すばらしいことばかりだったというわけではおそらくないと思います。「こういうところには困難を感じた」、「やはり、こんな課題もある」。それがまた次の研究を生み出すことにもなるわけですから、自分の実践を内省した上で課題が書かれている。これもまた、ちょっと日本的ですけども、奥ゆかしさもあって、か

えっていいのではないかなという印象を受けました。

そういうことを感じながら、今回、すばらしい論文をたくさん読むことができました。また、私のほうでもそれを生かしていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

審査委員の講評・所感

杉山吉茂先生



受賞者の先生方、おめでとうございます。

ちょっと私的なことになって申し訳ありませんが、私は数学教育を専門としている者です。今回の応募論文数は、算数・数学が1番多かったということでしたが、受賞者を見ると算数・数学の先生は一人もいません。とても悔しい思いをしています。私は、第一次審査を経てきたものを見ただけですから、責任はそんなにはないとは思いますが、ここに座ってこの事実を見せられて思うことは、学習指導要領に基づくカリキュラムの変化が大きいのではないかと思います。今回の最優秀賞、優秀賞のなかには、算数・数学は1編もありませんでしたが、私がこれまで審査委員をやってきた間には、最優秀賞ともに小学校算数、中学校数学だったこともあります。それが何に由来しているかというと、数学の教育観、算数・数学の学び方、あるいは、教え方の基本が違っていることにあるのではないかと思います。

簡単に言うと、昭和30年代、昭和40年代は、

「教育内容の現代化」が推し進められていた時代でした。新しい考え方や見方を中心に展開し、レベルが高い時代でありました。新しい考えがいろいろ試みられた時代でもありました。内容が多くなりましたが、楽しい時代でもありました。

その反動で、やがて、基礎・基本の重視に移り、ついには、内容の3割削減の時代に移りました。そこで養われた数学教育観は、基礎的な基本的な数学を分かりやすく教えればいいというものでした。「教育の現代化」で育った先生方は、もうそろそろ退職なさる時期です。そういう先生方に代わって、内容が3割削減で育った先生方が中心になりつつあります。そう考えると、学習指導要領の影響は、非常に大きいのではないかと思います。

昔「算数・数学は面白い」、「自分で考えられるからいい」と思っている先生や子どもがたくさんいた時代がありました。それがあつた時期から、「これは覚えておかなければいけないものだ」、「これ以上のことは知らなくていいんだ」という数学観が出てきて、悔しい思いをしたことがあります。今、「数学的な考え方を大切にしよう」と言っている先生もたくさんいます。数学的な考え方を大切にしようと言っている中身は、子どもが数学を見つけ、子どもが発展させることができるという数学観を大事にしようということです。そう言われている新しい学習指導要領に期待して、いずれまた算数・数学が最優秀賞を取るような時代が来ることを期待したいと思います。

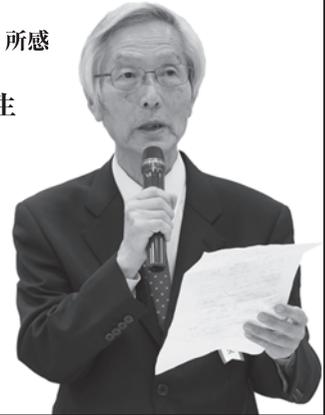
このことは、算数・数学に限ることはありません。それぞれの教科についていえることだと思います。

勝手なことを言って申し訳ありませんが、私は、もうそろそろ審査委員を辞めなくてはいけないと思うので、期待だけ述べて挨拶にさせていただきます。

よろしく申し上げます。

審査委員の講評・所感

武内 清先生



審査に関わった一人として、感想と受賞された先生方にお祝いを申し上げます。

私は教育社会学という分野が専攻で、その立場から、「教育の世界は熱い思いが強すぎて基本的な科学的な手続きがおろそかになっているのではないか」、「科学的、実証的なことをきちんと現場でやってほしい」といつもコメントしてきました。今回もそれを最初に申し上げたいと思います。さらに、全体的な感想を申し上げます。

時代を反映した内容や方法の応募がとても多く、また、選ばれたものも、そのようなものになっていると思います。時代的な特性として感じることは、第一は、地域の特性を生かした教育実践が多く見られました。山形県南陽市立梨郷小学校・淀野秀樹先生の食農教育の実践や茨城県神栖市立大野原西小学校・窪谷理先生のクロメダカの観察飼育も地域に根ざした、地域の資源をととてもよく利用したものだと思います。第二に、子どもたちの学びにおいて、アクティブ・ラーニング的な主体的な学習の重視が各研究で見られました。広島県福山市立塔遠中学校・新谷陽子先生の古典学習においても、調べ学習、意見交換会、群読、創作など生徒の主体性を生かした学びの工夫が散りばめられていると思いました。第三に、子どもたちのグループワークや共同学習の重視が挙げられます。これは多くの実践で見られていますが、さらに福岡県宗像

市立河東中学校・下野六太先生のスモールティーチャーの学習のように、できる生徒が指導役を果たすような試みも感心しました。第四にICT、情報機器の活用で、これは各所にいろいろな工夫をして大きな効果を挙げていると思います。第五に教科横断的な研究、また部活動と連携したりといった特徴があると思います。第六に学校全体ないし、全学的な取り組みが、多く見られました。校長先生が応募された学校づくりの実践です。鳥取市立美和小学校・三谷祐見先生がなされた全学の俳句を取り上げた実践などは優れたものだと思います。そのように、とても今の時代を反映した、優れた、時代に敏感な研究が多くあって、それはとてもいいことだと思います。

一方で、伝統的と言いますか、従来多く見られた各教科の特性に沿った教育方法の工夫というものが少なくなってきたように感じました。今回、中学校の理科の運動単元を扱った香川大学附属坂出中学校・若林教裕先生の実践は、理科の教科に沿ったものだと思います。もっとこのような教科特有なものもあっていいのではないかと思います。

今回、受賞された先生方の実践が広く全国に公開されて、日本の教育実践の水準の上がることを願っています。先生方、おめでとうございます。

審査委員の講評・所感

壺内 明先生



「東書教育賞」を受賞された先生方、おめでとうございます。先生方は、現在、学校教育の各分野で問題提起されている教育課題等に率先垂範してチャレンジし、研究・研修を積み重ねられ、素晴らしい成果を上げていただきました。私からは、ICT部門を除いた中学校の部について所感を述べさせていただきます。

最優秀賞の広島県福山市立培遠中学校の新谷陽子先生、おめでとうございます。「古典に親しむ生徒を育てる学習指導の実践」というテーマで、現行の学習指導要領はもちろんのこと、次期学習指導要領でも重要視されている「古典に親しみ古典の表現を味わい、理解を深める」ことを目指して、指導法の工夫・改善に取り組み、多くの研究成果を上げられました。日本の代表的な竹取物語、枕草子、平家物語、徒然草などについて、授業を通して生徒に「古典のおもしろさ」を伝えていった実践研究です。1年生から3年生まで、毎月グループで暗唱させ、授業の最初に全員で音読させて、学級対抗群読大会へと士気を高め、さらに学年群読にまで発展させ、文化祭や3年次の学習発表会、公開授業まで高めていった取り組みは、まさに古典学習の先駆的な実践研究であります。学力向上にも成果を上げたことは、他教科にも大きな示唆を与えてくれる指導法です。また、この実践研究は、教科横断的な取り組みにも発展しており、高校の古典学習への接続もスムーズになるものです。「古典に親しむ」生徒が益々増加することは、間違いないと確信しています。今後のご活躍を期待しています。

次に優秀賞の福岡県宗像市立河東中学校の下野六太先生、おめでとうございます。保健体育科の授業を通して、「子どもの自尊心を高め、豊かな人間関係を目指す」指導法の工夫に取り組みました。子ども同士の共同学習（スモールティーチャー学習）や、ICT教育を通して、達成感や喜びの共有化を図ることによって、「いじめ問題」の解決にまで発展している実践研究であります。先生のこの実践は、まさにどの先

生も即実践できるという意味で大きな教育的価値があります。仲間との共同学習は、各種目で上達の早い子どもが仲間を教えていくというスマールティーチャー（ST）を導入し、お互いに助け合い、カバーし合うことで感謝の気持ちを育てています。バスケットボール、水泳、マット運動などでたいへん効果的であることを検証していただきました。ICT教育では、ビフォービデオからビフォーアフタービデオに至るまで、ねらいと内容を明確にして実践し、クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライなどの指導で多くの成果を上げられました。今後とも継続して実践研究が続けられますよう期待しています。

同じく、優秀賞の香川県の香川大学教育学部附属坂出中学校の若林教裕先生、おめでとうございます。次期学習指導要領で重要視されている必要な資質・能力の柱の一つである「学びに向かう力」の育成を図るために、三つの観点を重視して、「科学的な見方や考え方を高め学びに向かう力を育む運動単元の実践」というテーマで研究され、多くの成果を上げられました。「学びに向かう力」の育成は、資質・能力の育成の中で最も重要な課題であり、子どもたちが将来どのような社会や世界と関わり、よりよい人生を送ることができるかの基盤づくりになるものです。理科の運動単元の授業で、「主体的に考えることができる問いと指導展開の工夫」、「語り合える授業の工夫」、「学びに向かう力を実感できる振り返りの工夫」の3観点を意識しながら、授業改善を図っている様子が伝わってきました。子どもたち一人一人が「主体的・対話的で深い学び」につながっていくアクティブラーニングの視点に立った授業過程の工夫が十分に生かされています。このような授業を是非、今後とも引き続いて実践されるよう期待しております。結びに、受賞された先生方の益々のご健勝とご発展を祈念して感想とさせていただきます。誠におめでとうございます。

審査委員の講評・所感

露木昌仙先生



多くの応募の中から厳正な審査を経て、今回、東書教育賞を受賞された先生方、誠におめでとうございます。受賞されました先生方の教育実践の論文は、現行の学習指導要領はもとより、間もなく告示される次期学習指導要領の改訂の趣旨も踏まえ、学校やそれを取巻く地域社会の様々な課題について、解決に向けたチャレンジに果敢に取り組んだ成果であると受け止めております。

これからの学校づくりを進めるにあたって、とりわけ教育課程を開かれたものとしていくことが大切です。教育課程を開くということの概念は多岐にわたる要素や内容が含まれますが、今回受賞された教育論文は、いずれも実践の熱い思いの中に開かれた教育課程の視点があったのではないかと感じているところです。

最優秀賞となられた、山形県南陽市立梨郷小学校の実践は、まさに地方創生の取り組みであると感じます。現在、公立小学校は児童数の減少により、廃校となる学校、統合される学校があり、2万校のうち250校程度、毎年、数が減少しています。地域の方々の学校を残したいという強い思いだけでは、費用対効果の論理には負けてしまうのです。梨郷地区も地域の活性化が大きな課題です。そのような状況の中、南陽市の教育振興計画にも位置付けられた地域総合型教育として、「のびのびファーム」が継続、発展しています。これは子どもたちが地域の

方々の協力を得ながら野菜を作り、学校行事等で使う野菜を育てるということだけではなく、小学生の子どもが販売し、収益を他地区との交流に活かす、農業復興に望みをかけるという素晴らしい取り組みです。全国に児童数が100人に満たない学校が4,430校余りあります。先ほど、2万校と言いましたが、その5分の1くらいの学校は比較的小規模な学校であると言えます。児童数の減少が続く地域の学校にとって、本実践は、たいへん参考となる実践であると感じました。

優秀賞となられた、茨城県神栖市立大野原西小学校の実践は、学校のおかれた地域の特色を活かし、理科学習を意識した環境整備に努めていらっしゃいます。理科学習で用いる教材は教材業者から購入することが多いわけですが、地域環境を活かし、学校周辺の水路に生息するクロメダカを採取、飼育し、児童が日常的に観察できる場を校内にビオトープとして設けたことは素晴らしいと思います。また、学習においては、見通しをもつこと、グループで活動し協働すること、活動の振り返りをするなど等を重視しています。これは児童にメタ認知能力を育むうえでも重要な点であると考えますし、これからの授業の在り方の参考となるものと言えます。ノートの内容を統一させるなどの工夫で指示等がなくても児童が主体的に活動できる、安全に配慮しつつグループごとに学習課題にあった場所で活動させるなど、授業のルールという形で学びのスタイルを定着させ、主体的な児童の学びに結びつけようとされた点も素晴らしい実践であると思います。

もう一つ優秀賞となられた、鳥取市立美和小学校の実践は、2年間で児童の「自信と活力」が溢れる学校にしたいという、校長先生の熱い思いが伝わる取り組みです。私は、やはり、教育実践には熱い思いがなければならないということが一番感じています。そのためには校長先生が明確にリーダーシップを発揮して、経営ビジョンを示すことは必要条件です。今回、俳

句や句会を通して児童に「自信と活力」をみなぎらせたいという思いを教職員に理解させ、納得させること、さらに、学校だけでなく保護者・地域も巻き込み、改善を重ね、やがて賛同をいただくまでに実践が定着していると感じます。教職員がどのようにこの実践に取り組んでいたのかも示されると、なお参考にできると感じました。

最後に、東書教育賞に、論文を寄せられた先生方の益々のご発展を祈念して感想といたします。誠にありがとうございます。

審査委員の講評・所感

東原義訓先生



受賞された先生方、ありがとうございます。私は、赤堀先生とともにICT関係の論文を主に拝見させていただきましたので、その方面から話させていただきます。

まず、優秀賞の愛知県豊田市立石野中学校の安藤司先生の実践と論文は、ICTが人と人との関係をすごく深めていくものだということを示していただいた点がたいへんありがたかったと思いました。

また、同じく優秀賞の茨城県つくば市立並木小学校の中村めぐみ先生の論文は、「プログラミング教育とは何なのか」、「プログラミング的思考とは何なのか」ということが、きっとこれから問われてくるのだと思うのですが、それに対する非常に分かりやすい明確な指針を示して

くださいました。そして、何よりも、中村先生ご自身が、この実践を通じてプログラミング的思考ができるようになったのではないかと、いうことを私は感じました。このことは、自分としてもうれしく感じる場所です。

新学習指導要領に向けた答申では、学習指導要領を実現するために不可欠なものとして、もちろん教師や教材も大事だと書かれているわけですが、そこに並んでICT環境の整備も不可欠であるとなっています。これは過去の学習指導要領になかったことです。それから、もう一つ特徴的なことは、現在の学習指導要領でも、「言語能力・言語活動」は重視されているわけですが、それと並んで全ての教科等の基盤になる力としての「情報活用能力」というものが挙げられています。この点は今後の教育や東書教育賞の論文などに大きな影響を与えるのではないかと考えています。

そういった観点から少し振り返ってみますと、この東書教育賞には、かつてICT部門はありませんでした。それが、ICTに関連する論文が出てきた頃から、ICTも大事だということで、独立させてICTの部門ができました。当時は、ICT部門の審査は、坂元昂先生や赤堀先生とともに全く別に審査していました。ところが、ICTが当たり前ものになってきましたので、現在は、先生方が論文を応募して下さる際に、ICT関連論文の場合は当該のICT活用欄にチェックをつけてくださいという形にし、一般論文と同一の枠で審査するようになりました。

私は新学習指導要領のことを考えると、また応募スタイルを少し変えなければいけないのではないかと個人的には思っています。つまり、全ての教科の基盤になる情報活用能力や、ICT環境が必要不可欠なものとなると、ICT活用欄にチェックをつけることよりも、考えるための道具としてICTを活用したとか、友達と協働するための道具としてICTを活用したなど、情報活用やICT活用は全ての教科等で関係するわけなので、そういうことにも言及した論文である

というチェック欄が必要になるのではないかと考えている場所です。

東書教育賞で賞を取られる方々は、すでに全国でも有名な方もいらっしゃると思いますが、今日まで誰にも知られていないような実践をされていた方に急に光が当てられて、皆さんの前に出てくる、そういう特徴もこの賞にはあると私は感じています。先生方が素晴らしい実践をして下さって、それを応募して下さり、そして、今日ここにおいでいただくことによって、東書教育賞は皆さま方のおかげでより素晴らしいものになっていきます。感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございます。